



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヤヌシュ・コルチャックの教育実践〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	大澤, 亜里
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第13340号
Issue Date	2018-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72093
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Ari_Osawa_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（教育学）

氏 名 大澤 亜里

審査担当者 主査 教 授 松本伊智朗

副査 准教授 鳥山まどか

副査 准教授 白水 浩信

副査 教 授 塚本 智宏 （東海大学札幌教養教育センター）

学位論文題名

ヤヌシュ・コルチャックの教育実践

本論文は、ヤヌシュ・コルチャック（1878-1942）の教育実践の具体像、および子ども観・教育思想の形成と深化の過程を、ポーランド語の一次資料に基づいて分析、再構成したものである。ユダヤ系ポーランド人の教育家、思想家、児童文学者であるコルチャックは、彼が院長を務めた孤児院ドム・シェロットにおける先駆的な教育実践で知られ、しばしば「子どもの権利条約の父」として紹介される。映画や伝記などでは、子どもとともにホロコーストの犠牲となった英雄的人物として描かれることが多い。

しかしながら、本論文で著者が指摘するように、コルチャックに関する研究は伝記的叙述が多く、教育実践や思想に関する研究も彼自身の著作を考察対象としたものが多い。また日本においては、ロシア語、英語、ドイツ語に翻訳された文献に基づく研究はあるものの、ポーランド語の原典、一次資料を分析したものはない。こうした研究状況のなか、本論文は孤児院ドム・シェロットとその運営母体である孤児救済協会の実践・運営記録、定期刊行物等の一次資料を丹念に読み解き、実践と運営の具体的な姿とその変遷を明らかにしている貴重な研究成果である。学術的貢献として特に評価しうる点は以下である。

第1に、実証的な検討と再構成を裏付ける一次資料の質の高さ、および収集範囲の広さである。コルチャックの著作物はもとより、その教育実践を最も近接した形で知りうるドム・シェロット等の施設の定款、運営・実践記録、定期刊行物、関連する新聞・雑誌記事等を一次資料として用い、コルチャックの教育実践を十分な歴史的具體性をもって叙述し得ている点は高く評価される。資料収集はワルシャワ大学留学中の修士論文執筆以来10年あまりの長期にわたり、ポーランドの研究者との協力関係下で行われ、現存が確認される一次資料のほぼすべてが収集されている。こうした一次資料に基づいた研究は日本では皆無であり、日本におけるコルチャック研究の水準を引き上げている。

第2に、分析枠組みの独創性と一貫性である。コルチャックの教育実践がドム・シェロット設立時に掲げられた「活動計画」における次の3つの観点、a) 健康な子どもの発達について知る、b) 大人から子どもを解放する、c) 養育施設の精神を改革する、というコルチャックに内在した観点を軸に、さらに著者は、a) : ①子ども観察とその記録、b) : ②生活に必要な家事仕事および年少者の養育を子どもたちが担う方法、③子ども自身が生活上の様々な問題解決や決定を行う方法、④情報や意見を伝達・交換・共有する方法、⑤自分自身について理解し自己教育を促す方法、c) : ⑥外の世界との交流、⑦子どものプライバシーや財産を保障する方法、という7つの視点を設定し、実践を捉えようとする。この視点の設定により、コルチャックの教育実践がほぼカバーされるのみならず、往々にして雑然としがちな教育実践分析に一定の系統性をもたせることに成功している。

第3に、教育実践の変遷と展開過程に沿った時期区分に即してコルチャックの思想形成の過程が描かれると同時に、当時のポーランド、ワルシャワの社会情勢と児童保護の状況に位置付けられながら検討がなされていることである。著者はドム・シェロット設立以前の実践の検討からこの作業を開始し、コルチャックの出発点を確認する。そのうち、ドム・シェロットの設立、展開、危機といった過程とその時期の教育実践の具体像を、それぞれの時期のポーランド、ワルシャワの社会情勢と児童保護の状況を踏まえて検討する。あわせてドム・シェロットの運営母体である孤児救済協会の年次活動報告書の丹念な分析から、それぞれの時期の施設の運営基盤が示される。こうした作業を通して、コルチャックの教育実践と思想形成が歴史的、具体的に再構成され、これまでの英雄的人物として描いている伝記的研究、主にコルチャックの著作、それもごく限られた時期の著作に依拠した思想・実践研究の限界を超えることに成功している。

審査の過程において、いくつかの課題が指摘された。第1に、コルチャックが教育観の基底において「労働 (praca)」概念の、詳細な検討の必要性である。これは労働 (労作) 教育の系譜とどのような関係にあるのか、コルチャック自身は実践の展開の中で「労働 (praca)」を「自治 (samorząd)」と表現するようになっていくがこの点の意味をどう考えるか、いつそうの検討が求められる。第2に、当時の一般的な児童保護の方法からみたときの、ドム・シェロットの特徴・特殊性についての検討である。例えば孤児や貧困家庭の子どもを保護する施設であるにもかかわらず、家族状況の調査を含め入所する児童を半年かけて選定する (緊急的な対応という要素はない) という点をどのように考えるのか、という指摘である。第3に、ドム・シェロット及び孤児救済協会の「ユダヤ的性格」をどのように考えるか、という点である。

こうした課題がありながらも、上述の学術的貢献が認められることから、本論文は先行する当該分野の研究の発展に大きく資すると高く評価される。よって著者は、北海道大学博士 (教育学) の学位を授与される資格があるものと認める。

以上